通訳の授業が大学生にもたらす影響　―　シャドーイングによる英語発話の変化

高橋　絹子
関西大学外国語学部・上智大学国際言語情報研究所準所員

本研究は、大学における通訳の授業とは何なのかということを考える一連の研究で、TILT (i.e., Translation in Language Teaching)(Cook 2010) の枠組みにより行っているものである。今回は通訳の授業でよく行われているシャドーイングを取り上げる。2004年現在では、全国には139の通訳クラスが存在する（染谷ら2005）が、現在ではさらに多くの通訳クラスが存在すると想定される。ただ日本においては、プロの通訳者の育成は歴史的に民間の通訳学校が行っていることから（佐藤 2004）、大学の通訳の授業の目的は必ずしも通訳者の養成ではない（染谷ら2005）。では訳出の練習やシャドーイングなど通訳学校で行われているような訓練は、どのような目的で行われ、どのような効果があるのであろうか。

先行研究では、学生の期末に実施したアンケートに基づいた調査で、通訳の授業が英語学習の動機づけによい影響を与えているということが報告されている（Takahashi 2017）。また別の先行研究では、第三者が日本語で自己紹介したものを英語に訳す逐次通訳の練習をした結果、自らの英語の自己紹介の発話語数が増加し流暢性も上昇し事前と事後の変化に有意差が見られたと報告されている（高橋 2019）。本研究では他に通訳の授業でよく実施されしかも通訳の訓練では必須訓練といっても過言でないシャドーイングの発話への効果を測定するために、第三者が英語で自己紹介をした素材でシャドーイングを繰り返し行い、事前と事後で英語での自己紹介の発話の変化を測定した。その結果、事後テストでは発話語数は 269.7%増となりシャドーイングでもやはり事前テストと比較して有意差が見られた（$t(40)= -10.8, p < .001$）。その一方で先行研究と同じ方法で、再度、第三者の日本語の自己紹介を英語に訳す逐次通訳の練習のみを行った群の事前と事後の発話数を比較してみたところ、事後の発話語数の増加は 379.5%増となり、事前テストと比較すると、再び有意差が認められた（$t(38)= -12.0, p < .001$）。以上のように通訳の授業で行われている通訳の訳出の練習やシャドーイングにより、自己紹介においては発話数の増加が確認できた。今後、スピーキングの授業の結果と比較する必要はあるが、発話語数を増やすことを目的のひとつとして、通訳の授業を実施することも可能ではないか。さらにシャドーイングと訳出練習の違いを理論的枠組みを用いて考察したい。

佐藤あずさ(2004)．日本通訳業界論 博士論文．早稲田大学.
染谷・斎藤・鶴田・ 田中・稲生（2005）我が国の大学･大学院における通訳教育の実態調査,『通訳研究』第5号:285-310
高橋絹子(2019)．日英の逐次通訳訓練によってもたらされる大学生の英語の発話の変化」『上智大学言語学会会報』 上智大学言語学会 第33号1～5頁
Cook, G. (2010). *Translation in Language Teaching*. Oxford.
Takahashi, K. (2017). The Impact of Interpreter Education: What is Interpreter Training that is Conducted at the Undergraduate Level in Japan? *ASTE Newsletter* No. 65, 61-71.